年は、6月から8月まで多雨となったことから発生が増加したと考えられる。病原菌は枝や葉の病斑で越冬するため、当年だけでなく、翌春の感染源の増大も懸念される。このため平成29年度も注意が必要である。近年、6～8月に多雨となる傾向が続いていることから、重点防除期以降も、本病に対する薬剤散布間隔が開きすぎないように防除を実施する必要がある。

また、青森県では、平成28年に本病に対する基幹防除薬剤であるエルゴステロール生合成阻害（EBI）剤に対する耐性菌の出現が確認され、平成29年から本病に対する EBI 剤の使用が全面的に禁止された。道内では EBI 剤感受性低下の事例は確認されていないが、EBI 剤も含め同一系統薬剤の連用は避け、他系統薬剤とのローテーション散布を心懸ける。

3) りんごの腐らん病

腐らん病は、りんごの最重要病害であり、主幹、主枝および枝梢部に発生して胴枯れ、枝枯れ症状を引き起こす。本病は、これまでも多くの園地で発生がみられているが、平成28年は発生面積率64.3%（平成27年：44.6%）、被害面積率28.8%（平成27年：15.8%）と、ともに増加した。この原因として、近年の多発傾向で感染源密度が高まっていること、平成23年の凍害による樹体損傷、平成27年の多収によるなり疲れと春先の急激な温度低下による凍害などの影響に加え、主要品種「つがる」が導入されてから年月が経ち、樹齢が高まっていることなどが考えられる。対策としては、適切な剪定、施肥、土壌管理、干ばつ防止のための草生管理、適正な着果量の確保など、基本管理の徹底が最も重要である。また、り病枝の切り落とし、病患部の削り取りを行い、切り取った枝や削り取った樹皮は園外に持ち出して適正に処分する、傷口にはゆ合剤を塗布することも重要である。せん定などによる傷も感染口となるので、ゆ合剤を塗布するとともに薬剤の散布も行い、本病に感染しないよう管理を行う。

4. 平成28年に新たに発生を認めた病害虫

平成28年に新たに発生を認めた病害虫は9病害虫（病害8、害虫1）である。

- (1) ばれいしょの黒あし病（病原の追加・国内新発生）：これまでの3種に加え新たな病原菌を確認。
- (2) キャベツの株腐病（病原の追加）：病原菌にリゾクトニア・ソラニの新たな菌糸融合群を追加。
- (3) レタスのチューリップヒゲナガアブラムシ（新寄主）：ウイルス病を媒介するので注意。
- (4) ほうれんそうのべと病（新レースの出現）：レース1～8に抵抗性の「カイト」で発生。
- (5) ほうれんそうの白斑病（病原の変更・追加）：病原菌の分類体系再検討による種名変更。
- (6) ネギの腐敗病（新発生）：育苗中に発生。葉に3～5mmの不整形病斑および水浸状の腐敗。
- (7) リーキの葉枯病（病原の変更）：病原菌の分類体系再検討による種名変更。
- (8) トルコギキョウの炭そ病（新発生）：定植直後の2～3対目の葉に淡褐色円形の陥没病斑。
- (9) ぶどうの晩腐病（病原の追加・国内新発生）：病原菌の分類体系再検討による種名変更。

そのなかに、国内で初めて確認された *C. viniferum* が含まれていた。

特に注意を要する病害虫および新発生病害虫の詳細な情報については、北海道病害虫防除所のホームページに掲載していますので、そちらをご覧ください。

詳しい内容については、次にお問い合わせ下さい。

道総研十勝農業試験場

電話 (0155) 62-2431 E-mail: tokachi-agri@hro.or.jp